



全身愛撫編





ナミを捕らえた男たちは、
あからさまに下心ある笑みを見せつけた。

「さて、どうやって拷問してやるのか」
拷問とは名ばかりのレイプ。

いや、レイプもちろん拷問になる。
しかしナミはその程度のこと
屈するほど弱くはない。
むしろ男たちを睨み返し、
付け入る隙を、逃げる隙をうかがう。

「おっと。逃げようと思って
いるんだろうが、

そう簡単にはいかないぜ」
そのくらいは分かる。しかし、
どんな敵にだって油断はあるはず。
ナミはじっくりと周囲をうかがい、
隙を探る。

「そうそう。お前の仲間が、
面白い能力を持っているよな」

なんのことだろう。いぶかしむナミに、
男はその答えを見せつける。
それはロビンの、
ハナハナの実の能力だった。



さすがのナミも、

その光景には驚愕せざるをえなかった。
男は無数の腕を生やし、

ナミの体をまさぐり始める。

「俺は人の能力を奪うことができるのさ。

これは、なかなか便利な力だぜ」

腕を押さえる手、脚を押さえる手。

胸を揉む手、股間をまさぐる手。

男はその幾多の腕を上手に使いこなし、

ナミを愛撫しまくる。

一度に全身を触られる感覚は、

まるで大勢の男に取り囲まれているよう。

ナミはなんとかして逃げようともがくが、

身をくねらすことさえもままならない。

振りほどいても振りほどいても、

すぐに別の手がナミを押さえつけた。

そして手は、遠慮なく乳房を揉み、

女陰をこねる。

荒々しさの中に確かな快楽が


あるのを見つけて、

ナミはハッと息を呑んだ。

「仲間の能力で犯される気分はどうだ？」


「ふん！ これくらいなんでもないわ！」

「その減らず口がいつまで続くか見物だな」



乳首も
そそり立たせて……
エロい女だぜ

いい顔に
なってきた
じゃないか



……!!

ほら
どこが気持ち
いいんだ?



男の愛撫は、さらに淫らさを増していった。

首筋から髪を撫で上げられると、こそばゆさに身悶えてしまう。

乳房を揉み、すくい上げられる。

突き出された乳首をつまむ指先は

あくまでも優しい。

しかしすぐに指先に力を入れ、強く乳首をつままれる。その刺激は強い。

くにくくと乳首をこねられると、

鈍いシビレが全身を駆けめぐった。

緩急ある愛撫は、もちろん乳首以外の

部分でもその力を発揮する。

腹をさすり、へそをくすぐるその指先。

尻を撫で回す手のひらの熱さ。

そして、股間へと潜り込む指も。

男は最初から、容赦なく女陰も撫でてくる。

手のひらで土手を揉み込み、

じんわりと熱くなってきたラビアをつまむ。

ひだひだを軽く引っ張られ、

左右に押し広げられる。指先がその谷間へと

潜り込む。

膣口を1、2度ノックしたかと思うと、

すぐに膣内に入り込んできた。



衣服をすべてはぎ取られると、もはや男の思うがままとなってしまう。快感はナミの体の奥底でくすぶり続けていて、

男の手がそれに火を付けていく。無数の手に押さえ込まれる

被虐的な快感もあるが、

ナミは必死に否定する。

もがけばもがくほど男は手の力を強め、手の本数を増やす。

増えた手がまた股間へと伸び、

ナミの女性器をいたぶり続けた。

無理矢理脚を開かされ、

むき出しになった股間。

そこにあるのは、濡れそぼった女陰。

陰唇をつまみ、左右に開く。

谷間の開いた性は快感のるつぼ。

男の手は容赦なく性器の隅々までをもてあそぶ。

クリトリスはつままれ、包皮を剥かれた。

尿道口さえもこねられ、つつかれる。

膣口をも押し開き、遠慮なく指を突き込まれ、

何度も何度も出し入れされる。

押さえ込まれた口から漏れるのは、

いつしか快楽の喘ぎになっていた。



あッ!!
あッ!!

ほらほら
もつと逃げないと
奥まで
ぶち込んでしまうぜ?

口でなんと言おうとも、
体の反応は素直だった。
男の愛撫は、ナミの体を
性欲にまみれた女のカラダに
してしまっている。

「それじゃ、そろそろいただこうか」
熟した果実を収穫するときが
来たのだ。男はその剛直を
ナミの果実へと突き立てる。
とろとろにとろけきった膣は、
男のものをなんなく奥まで受け入れた。
その熱さと快感に、さしものナミも
喘がざるをえない。

しかし心はまだ折れてはいない。
高く出かかった嬌声を呑み込み、
必死で耐える。

快楽の虜にはならない。
固く誓うナミの思いを、
男は容赦なく打ち砕いていく。
突き立てた最初から、
激しいストロークで責め立てた。
グツチヨグツチヨとあがる水音が
また卑猥さを助長する。

それでもナミは、絶対に屈しまいと
歯を食いしばるのだった。

あああああ！

膣の熱さは、早くもクライマックスを迎えていた。突き込まれる度に背筋を駆け上がったいく快感。その痺れに震える体。膣壁はナミの意志とは正反対に、男のペニスを包み込んで放さない。男はそんな名器に気をよくして、何度も何度も腰を振る。テクニクよりも、自分が気持ちよくなって射精するためだけの行為。それでもナミは、そんな乱暴な行為にさえも感じてしまう。膣を震わせてしまう。無数の手に乳房をこねられ、乳首をつままれながらの挿入。ねじ込まれ、子宮口をノックされる快感。引き抜く際、カリに引っかかる膣壁。そして、男の喘ぎが獣の咆哮となる。膣の最奥まで埋められたペニスに、射精の脈動を伝えてくる。熱い精液が膣を満たしていく快感に、ナミの口からも強い嬌声があがっていた。



囚われたロビンを待っていたのは、
男たちの優越感に満ちた笑みだった。

「さて、どうやって拷問してやるるか」

恐れを誘う気なのだろうが、

無駄なこと。この程度のことには慣れていて、

ロビンはつまらなそうに男たちを見て、

ふっと鼻で笑った。

「ずいぶんと余裕みたいだけどな、

その態度がいつまでもつか見物だぜ」

まずは挨拶程度に胸に触れる。

しかしそれは、ただの愛撫ではなかった。

いつの間にか、男の手が無数に

咲き誇っている。

もちろんロビンは、その能力が

なんなのかを知っている。

「いたいたいぜ、お前の能力。」

さあ、これでたっぷり拷問してやるう！」

さしものロビンも目を見張った。

その顔が面白いのか、男たちはまた笑う。

逆にロビンの顔からは、

余裕と笑みが消えかかっていた。




どうだ？
自分の能力で
犯される気分は？

男の腕がロビンの四肢を捕らえる。振りほどこうにも、体の自由は利かない。腕を捕られ、胸をさらけ出さされる。ロビンの巨乳に、男たちは歓声をあげた。手始めにと、その巨乳を揉みしだかれる。乱暴な行為だ。ロビンはなにも感じない。ただ気に入らないのだ。自分の能力を使われていることが。強く睨み付けるが、男たちも慣れたもの。その程度のことではびくともしない。むしろ好戦的な態度を取ることに喜びすら見いだしているらしい。男の手はさらに強く胸に掴みかかってくる。また増えた手で、太ももも撫で回された。罵声を浴びせようとすることもその口をふさがれ、ただ喘ぐだけでも苦しくなる。しかしロビンは簡単に屈したりはしない。なんとかして逃げだそうと体をよじる。男たちには、それがまるで身悶えているかのように見えるらしい。興奮の度合いは増していき、息を荒げる。そして乱暴さも高まっていった。



鎖が外されたのは、自由にしていいということではなかった。無数の腕に取り押さえられたロビンは、冷たい石畳の床に押さえつけられる。まるで大勢の男に捕まって押さえつけられているかのような感覚。ロビンは屈辱的な思いで男を睨み付けるが、もちろんその効果はない。徐々にその目から憎しみや怒りの力が消えていっているのを男たちは見て取った。腕たちからの愛撫に、また激しい力と淫らさを込める。

横たえてもツンと上を向いている乳房、すでに溢れんばかりに濡れた股間。さすがにこれほどまでに撫でられ続けていると、感じたくなかないのを感じてしまう。気をしっかり持たなければ。ロビンは唇を噛んで気を引き締める。しかし、体の震えは止まらなかった。



ダメだ……!!
逃げられない!

ほらほら
さっきまでの
余裕はどうした?

もっと
抵抗してみろよ

「どうだ?

自分の能力で
犯される気分は?

ほらほら

どこが気持ちいいんだ?
言ってみろ?」

「くっ!

気持ちよくなんか……っ!」

「言わないのか?

じゃあ

全部一度に触ってやるよ!」

「や、やめっ!」



「こんなに濡らしておいて、
感じてないわけがないよな」
「そ、そんなこと…ないわ！」
感じたりなんかしてない！」

衣服をすべてはぎ取られ、
愛撫が本格的な淫らさを見せ始める。
乳首をつまみ、引っ張られる。
痛みを覚える前に放される。
快感のバランスがいい。
そそり立った乳首を逆に押し潰され、
乳房に埋められる。
押し指を放すと、再びぶっくりと
立ち上がっていくその感触が
こそばゆかった。
もちろん乳房への愛撫も忘れない。
揉み込み、こね回す力加減が
慣れている。
そして、愛液に濡れそぼった股間の
隅々までをも触られていた。
クリトリスを、陰唇をつままれ、
こね回される。



指を愛液で濡らしているせいで、
敏感な部分を強くつままれても
痛みはまったく感じない。
膣や肛門へ突き込まれる指も同じ。
痛みどころか快感だけが
ロビンを襲った。

愛液が刺激を助長し、
刺激がまた愛液を溢れさせる。
快感から逃れようと実をよじっても、
押さえつけてくる手の強さは
変わらない。
逃げられないままなのだ。
腕からも、快感からも。

「私は感じたりなんかっ、くっ！
ああっ！」

「いい加減素直になれよ。
そしたら、もっと気持ちよく
してやるぜ」

「あっ くっ……ふさげないで！
あああ！」



いつの間にか、ロピンは抵抗力のほとんどを失っていた。そうでなければ、いくら誘導されたところでこんな格好をしたりしない。無数の手に体を起こされ、固定され、ロピンは四つんばいにさせられる。それは、まるで犬の格好だ。愛液に濡れた股間をさらけ出した、雌犬の格好。男はそんなロピンに、遠慮なくいきり立った剛直を突き立てる。高くあがる悲鳴に氣をよくして、最初から激しく腰を振る。臆の奥まで突き立てる。ロピンはしかし、まだ心を折られたわけではなかった。なんとか抵抗を試みるも、やはり挿入の快感は激しすぎる。感じてなどやらない。ロピンは必死で快楽に抵抗し、声を荒げた。悔しさと怒りを吐き出しても、男たちが意に介することはない。むしろ喜び勇んで腰を振り続ける。臆の快感はやはり、女の身には辛かった。



もう、膣は完全に男のものを欲していた。熟れた女体が、性欲に負けた。それでも心だけは屈しない、随ちたりしない。ロビンは歯を食いしばる。しかしそれは喘ぎ声を抑えるだけで精一杯。男たちもそれを分かっていた。何度も体勢を変えられ、あらゆる角度から膣を突かれる。最奥までねじ込まれて、子宮口をノックされる。ズンと響き、息さえ詰まる。浅い前庭を擦られると、あまりの快感に自然と体が跳ね上がった。数度浅く掘り、唐突に奥まで突き込む。逆に何度も奥ばかりを突く。男の挿入テクニクに、ロビンはもはや耐えきれなかった。心では抵抗していても、体が限界なのだ。快楽の虜になった膣が、高みへと導く。そして快楽の量がロビンの心を満たし尽くし、心の堤防を決壊させる。理性が流れ出していき、最後に残ったのは快感だけ。我慢しすぎたせいで絶頂感も強く、ロビンはあられもない声をあげた。

強制絶頂編





囚われたナミの前に現れたのは、怪しげな覆面を被った男たちだった。

しかし覆面を被っていても、その下で下品な笑みを

浮かべていることは見て取れる。

ナミは男たちの目的が自分の体であると、すぐに理解した。

「さて、どんな拷問をされるのが好みだ？」

どんな拷問も好みではない。

しかし男たちがその手を止める

ことはないだろう。

ナミはふと、片方の男のしている

手袋が気になった。

「逃げようなんて考えても無駄だぜ」

にじり寄ってくる男たちに、ナミは怒りをあらわにする。

男たちはそれさえも楽しんでるかのよう

に、覆面の下でクククと笑った。

どう見ても、男たちは油断している。

ナミは冷静に周囲を確認する。

怒りや屈辱の感情に流されてはいけ

ない。そう自分に言い聞かせた。

男たちに捕らえられ、

あつという間に裸に刺かれる。

それだけでも十分な怒りが込み上げるが、

男たちはさらに体を縛り上げてきた。

逃げられないようにと何重にも縛る。




俺の手の
感触はどうだい？

この手に愛撫されて
嗚ちなかつた女は
いないぜ

…!!

「よく似合ってるぜ。まるで縛られるために
生まれてきたみたいだ」
馬鹿馬鹿しい褒め言葉だ。
ナミは怒りを吐き捨てる。
男たちはそんなナミの仕草を眺めながら、
いちいち楽しげな声をあげる。
そしてついに、男たちの愛撫が始まった。
それも、ただの愛撫ではない。
男の1人は、あるうことかその手を
小刻みに振動させているではないか。
まるでローターのような振動を
伝えてくるその手に晒され、
ナミは驚愕の声をあげる。
それがハードな愛撫の
始まりを告げる合図になった。

「いつまで持つか、楽しみたな」
（こんな感覚始めてっ！
いや……感じさせられる！？）



イっちゃ駄目……
イカされたら駄目よ！

なんとか
耐えなくちゃ！

振動する男の手が、ナミの体を隅々までまさぐる。胸も、股間も余すところなく触り、撫でまくってくる。ただ触られるだけでも感じてしまうのに、この振動はかなり効いてくる。ナミは歯を食いしばり、なんとかこの特殊な官能にあらがった。「素直に声を出せば、少しは楽になるものを」我慢していることなどお見通しらしい。それでもナミは、屈するわけにいかない。全身をしびれさせてくる男を睨み付け、怒りで快感を忘れようとする。しかし男にとっては、なんの痛手にもならない。楽しい声は、淫らさを増していく。胸を鷲掴みにされ、痺れの強弱を付けて揉まれた。そそり立つ乳首もつままれる。股間も同じようにされると、さしものナミであっても声を殺せなくなってくる。愛液が内ももを伝っていくのが分かる。それがまた、ナミの心を揺さぶった。



あああああ！

足腰に力が入らなくなってきたのを見越されたのか、

今度はイスに縛り付けられる。

もちろんそれは、ナミに楽を

させてやろうという気配りではない。

男たちはむしる欲望を目の奥に灯し、

ナミの脚を押し広げた。

「この手袋が気になっていたようだが…

…使い方を教えてやるう」

見せつけるように手袋を脱ぎ、

むき出しになった股間にそっと触れる。

その瞬間、ナミは絶望的なまでの快楽に

体を跳ね上げた。絶頂だった。

「俺はこの手で触るだけで、

どんな女でもイかせられるんだぜ」

信じられないことだが、今実際に

体験してしまっただけ以上、

信じないわけにはいかない。

ナミはここへ来て始めて、

恐怖を持って男たちを見つめた。

その表情が気に入ったのか、

男たちは舌なめずりをして息を荒げる。

本当の拷問は、そして凌辱は、

今から始まるのだ。

「やめなさい！

触らないでっ……あああああ！！」

ミッ！



「ほら、簡単にイけるだろう？」
「い、イってなんか、ないわ……くううう……
あああああああ！」

反論する間も無く
2度目の絶頂。

（なによこれ！
こんなこと、あるはずがない！）
「あああああああッ！」

3度目の絶頂。

「またいったな。ほら、マ○コでもイけよ！」
「ひいっ！ そっ、そんな指、
突っ込まないで……っ！ ああああ！
あくあああああああ！」

本当に触るだけで
簡単にイカされてしまう。

「何度でも、好きなだけイかせてやるぜ」
（やほい……これ以上イかされたら、
おかしくなっちゃう！）



絶頂に次ぐ絶頂がナミを襲っていた。絶頂の度に、理性が少しずつ消えていった。触られただけでイクなどと、考えたこともない。

しかももう1人は、振動する手の持ち主。これもじわじわと効いてくる。

しかし、男はまだ切り札を残していた。振動させられるのは手だけではなかったのだ。

「ママ○コの中からも痺れさせてやるぜ」

振動させたペニスをぶち込まれる。

その快感は、並大抵のものではない。

敏感な部分すべてを痺れさせる男の技は、ナミの喘ぎを際立たせる。

時に激しく、時にゆっくりとした

ストローク自体もかなりの快感を煽り立てた。

しかも、触るだけで

イカせることができる男に、

触られたままで。

「イきまくりながら犯されるのは、

最高にハッピーだろう？」

ナミの理性は、もはや崩壊寸前だった。



あああああ
あああああ！

男たちは、ナミが気絶することを許さなかった。激しすぎる絶頂の連続に意識を失いかけるナミ。しかしまたすぐに新たな絶頂。

休む間もない連続絶頂で、

気絶すらできなくしているのだ。

嬌声を絞り出す喉もかれ、

もはやまともな言葉も出てこない。

気持ちいい、という意識だけが

ナミのすべてを支配していた。

「イク度に、マ○コがきゆうきゆう

締め付けてくるのがたまらないぜ」

「ああ。ケツの穴も締めまりまくりさ。エロい体だよな」

絶倫の男たちには、ナミは強い絶望を覚える。

すでに何度か射精され、

膣も直腸も精液まみれだというのに、

陵辱は止まらなかった。

むしろ勢いを増していくレイプ。

これほどの拷問は他にあるまい。

それでもナミは、屈服だけは

したくないと首を振る。

それが、記憶している最後の抵抗になった。

（もう、イキすぎて、

どうなってるのかさえ分からない）

「可愛い声で鳴くんだな。」

ほら、もう一発くれてやる！」

「もっと、もう出さないでっ……！」

「こっちもイクぞっ！ 子宮にぶっかけてやる！」

「駄目っ、これ以上出されたら……！」

「まだまだたっぷり可愛がってやるからな」

「うああっ！うあああああっ！」



ロビンを捕らえたのは覆面の男たちだった。その不気味さにぞっとする。

「さあ、楽しい拷問の時間だぞ」

表情はまったく見えませんが、覆面の下では薄笑いを浮かべているのだろう。

男たちの息づかいは荒く、

そして欲望に満ちていた。

「くだらないわね。私がこの程度のことです

屈するだけでも？」

「くっくっく。いつまでそんな態度を取って

いられるか見物だな」

男たちも慣れたもので、落ち着き払った

ロビンに対して憤りを見せたりはしない。

それどころか、抵抗されることを

望んでいるかのようによく笑う。

しよせん性欲に支配されただけの男たち。

ロビンは心の中でため息をつく。

適当に我慢していれば終わるだろう。

そんな風に考えていた。

しかし、それが甘い考えだったことに、

すぐに気付かされることになる。




あああああ！

男たちは、遠慮なくロビンの体をまさぐり始めた。ただ触られるだけのことで、感じたりするはずがないと油断していたロビン。大柄な男が揉みしだく胸。その手が突如、小刻みに振動し始める。息を呑んだ。この男の能力は、手をローターののように振動させることらしい。普通に愛撫されるだけと考えていたからか、その振動がやたらと強く感じられる。男は覆面の下で含み笑いしながら、たわわな乳房を余すところなく揉み込む。すくい上げるように掴み、鷲掴みにして揉む。びりびりと全身に振動が伝わった。そのローターのような指で乳房をつままれたとき、つい声をあげてしまう。あろうことか、乳房はもう痛いほどそそり立っていた。キュンとした乳房はつままれやすく、また快感も得やすくなっている。それでもロビンは、快楽など感じてはいないと自分に言い聞かせるのだった。



腕を高く吊され、さらに身動きが取りにくくなってしまう。なんとか逃げようともがいていたが、これでは足に力が入らない。男はそれを見越したのか、振動する手を股間へと伸ばした。遠慮も躊躇もなく、陰部を直接まさぐり始める。その振動が女性器を痺れさせる。わき上がり始めた快感に、ロビンは声を押し殺した。強く息を呑み、快感に耐える。こんなことで屈するわけにはいかないのだ。その様子が楽しいのか、男はさらに深く股間をまさぐる。振動する指を膣口に押し当てたり、肛門をついたり。声は殺せても、体の反応は抑えられない。ロビンの股間は、すでに愛液に濡れていた。もちろん乳房への愛撫も手袋の男によって続けられている。かさかさした布の感触がこそぼゆく、それがまたロビンに息を吞ませた。



駄目！
こんなの……！！

いきすぎて
頭があかしくなる……！


許してと願って、許されるはずなどない。むしろさらに強く攻められる。振動する男は、その手ばかりでなく全身を自由に振動させられるらしい。男は激しく震えるペニスを、熟し切ったロビンの膣へとねじ込んだ。ただの挿入ならば、あるいは耐えられたかもしれない。しかし振動するペニスから与えられる快感は、ロビンの想像を遙かに超えていた。入れられただけでいきそうになる快感。さらに、絶頂を呼ぶ男に触られている。乳房を、乳首に触られただけで、いつてしまうのは、もはや恐怖に近い。何度も何度もイカされながら、膣を高く突き上げられる。しかもペニスは激しく振動しているのだ。まるで全身が痺れさせられるかのよう。体中が絶頂感に充ち満ちている中で、正気など保てるはずもない。ロピンはすでに、失神寸前まで追い詰められていた。



何度も何度も意識が飛んだ。しかしその度すぐに、現実に戻される。まるで電撃に晒されたかのような絶頂。愛液が噴き出すのが分かる。体中の水分を、すべて愛液にしなければ足りなくなるほどの量が出ていた。それでも潮吹きは止まらない。絶頂感が続きすぎるせいで、子宮を突き上げられる衝撃に、強い酩酊感を覚える。まるで内臓に手を突っ込まれてかき回されているかのよう。あまりの快感に、もはや悲鳴しかあがらない。男はその口を押さえ込んだ。ロビンは、口で、唇で絶頂するという奇跡を体験する。フェラチオなどで得る快感とはまったく違う。本物の絶頂感。そしてまた、意識が飛ぶ。それと同時に理性も消え去っていく。もはやロビンは、絶頂する以外なにもできない状態になっていた。

超
寸
止
め
拷
問
編





こんな綺麗な女性を
拷問できるなんて
幸運ですね

反抗的な態度も
たまりませんよ

がんばって
最後まで
抵抗してみ
てください

ナミの前に現れたのは、どこにでもいそうな普通の男たちだった。捕らえられたという危機感さえ消え失せてしまいそうな感じ。ナミは、これならば逃げ出すのはたやすいだろうと高をくくった。「さあ、拷問しちやおうかなあ」気安い言葉をかけてくる男に、ナミは侮蔑の視線を投げつける。しかし男は意に介した様子もなく、ナミににじり寄った。「あれ？ ビビっちゃってる？ 大丈夫だよ……怖くないからさあ」怖くない拷問になんの意味があるのか。ナミは侮蔑の思いを一層強める。男は薄笑いを浮かべたままナミに近寄り、そしてその能力を見せつけた。息を呑むナミ。男の体からは、無数の触手が現れていた。



触手は当然のように男の意志のままに操れるらしい。

ナミはあつという間に絡みつかれ、衣服をはぎ取られていた。

ネットリとした感触が体中に走る。弱そうに見えてかなり

強い力を持った触手だ。

振りほどくことができず、ナミは苦しげなうめきをあげる。

触手のぬめり感への嫌悪も、そこには含まれているようだった。

「だから、怖くないってば……」
今からコレで、全身を舐め回してやるよ」
触手は最初から容赦なく股間へ

潜り込んできた。

女性器を撫で回してくる触手の感覚は、まるで太い舌で舐められているようなもの。激しすぎるクンニに、ナミは快感の声を

押し殺す。感じるわけにはいかない。男はナミの虚しい抵抗に

また薄笑いを浮かべ、自ら乳房をもてあそび始めた。

乳首を舐め、甘噛みされる感触に、ナミはまた官能をわき上がらせた。



もてあそばされる、というのはまさにこのような状態のことだろう。ナミは絶頂感に晒されながらもイけなまま、さらなる愛撫を続けられていた。先ほどまでに比べて、確かに体の反応は鈍い。あまり感じない。しかし、じわじわとした快感が蓄積している感じが分かった。しかも最初にたまっていた絶頂感は、まだ体に残ったまま解消されていない。いきたくてもイけない地獄。それがナミの心を疲弊させる。目の奥がチカチカとする。そしてビクビクと弾ける体。絞り出されてしまう声。男の愛撫はやむことなく続けられ、その快感がたまっていく。もはや逃げ出す術はない。この場所からも、この絶頂感からも。ナミの中で、こらえていたすべてのものが弾け飛んだ。



「んん？ どうした、
なにか言いたそうな
顔をしてるじゃないか」

「た、助けて！
もう、許して。お願い……！」

「駄目だな。許してなどやらないぜ」

「ひっ！ いやっ、もうイヤ！
こんなの耐えられない！」

「人にお願いするなら、
もっと丁寧と言わなくちゃな」

「お、お願い……せめて、
せめて1回、イかせて……！」

「もっとはつきりと言いなよ」

「あああ！

お願いっ、イかせて！
もうイかせてええええ！」



男の要求は、単純なことだった。自分がイかせてもらいたければ、まずはこちらをイカせること。ナミは男のそそり立ったペニスに、ためらうことなくしゃぶりついた。ビクビクと脈動するペニスが口内で心地よく跳ねる。ナミは一気に根本まですすった。熟さと硬さに淫らな思いを高ぶらせる。大きさも心地いい。夢中になってフェラをするナミを見て、男はゲラゲラと高笑いした。どれほど蔑まれようと、もはやかまう余裕などない。ナミはイかせてもらうため、必死でペニスを受撫する。舐めながら手でも扱く。もちそんな間も、触手からの愛撫は止まらなかった。ナミの膺はすでに触手に犯され尽くしているのだが、それでもイけないのだ。泣きそうになるほどの懇願に、男はついに射精で応える。ナミは口内の精液を、残すことなく飲み下した。

あああ
あああ
あああ！

ようやく願いが叶うときがきた。男はナミに、自ら股を開かせる。もちろんナミにあらがう術はない。言われるがままに足を開き、ペニスを待った。

「それじゃ、たっぷりと犯してやるぜ！」

一喝して、挿入する。

まだビームの効果か

効いているせいで、挿入の快感はない。

しかし膣にペニスが埋まった感覚は分かった。

そして、ビームの照射が終わる。

男は最後にまた快感をため込んでやろうと

激しく腰を振り始める。

出し入れされるペニスの感覚は鈍いが、

徐々に高まる絶頂感を覚えた。

そしてナミは、これまでの地獄から

解放される。

たまった快感が、一気に弾ける。

まず、頭を思いきり殴られたような

衝撃が来た。

次いでもう一撃。

激しすぎる絶頂感は、快楽というよりは

単なる衝撃というべきものかもしれない。

それでもやはり、ナミの口からは

快楽の絶叫がほとばしっていた。



ひどく疲れていた。
声はかれ、四肢からは力が抜けている。
絶頂するにはそれなりに体力もいる。
体を跳ね回らせる力もいる。
ナミはもう、絶頂を繰り返すすぎて
体力のすべてを使い切っていた。
それでもまだイカされる。
繰り返して絶頂感を味わわされ、
ナミは激しく疲弊する。
もうイきたくない。そう思っても、
男たちは陵辱をやめなかった。
イきたいとか、イきたくないとか、
ワガママな女だぜ」
薄笑いを浮かべる男は、それでも
容赦なくナミの膣をほじくった。
ノロノロビームを当てられ、
快楽を蓄積され。一気にそれを解き放たれる。
あまりの疲労で抵抗することもできない。
いや、抵抗したくない気持ちもあった。
この快楽から逃れたいくない。
そんな気持ちがある。
それはつまり、ナミが男たちに完全に
屈していることを示しているのだが。
快楽に溺れたナミが、
それに気がつくことはなかった。



つまらないことになった。
ロピンはその程度の感想しか
持っていないかった。

現れた男たちの目に光る欲情さえ、
ロピンにとってはつまらないもの。

「さて、お前は俺たちの好きなように
弄ばれるわけだが……」

「どうしてもらいたい？」

その程度で怖がると思っっているのだろうか。

ロピンはふつと鼻先で笑う。

「強気な女ですね。こういうのを

随とすのが楽しいんですよ……くくく」
できるものか。

この程度の陵辱には慣れている。

ロピンは男たちを睨み付け、

徹底抗戦の意をあらわにした。

「いいでしょう。」

あなたが最後まで随ちなければ、

その枷を外してあげますよ」

そんな許しなど必要ない。

こんな所いつだって逃げ出せる。

ロピンは心の中で、男たちを嘲った。
しかしそれが間違いであった。



油断していたロビンの目の前で、男が体から無数の触手を生やした。ヌルヌルとした触手があつという間にロビンの体に絡みつく。薄気味悪い感触だった。くすぐったさもあるが、それはすぐに官能に変わる。触手のぬめりと温かさは、まるで舌のよう。しかも意外と機敏に動く。全身を絶えず舐められている感覚におちいり、ロビンはひとつと息を呑んだ。もちろん、普通にも愛撫される。乳房を掴まれ、激しく揉まれた。一瞬、乱暴なように感じられたその動きは、しかしかなり緻密なものだった。撫で、揉み込む力の緩急をわきまえたそのテクニクに、つい喘いでしまう。触手の方も、手の動きに負けないほど淫らなテクニクに長けている。ロビンは男を甘く見たことを後悔していた。




体中の穴という穴を
この触手で
埋め尽くしてあげましょう

んッ

触手の攻めは、ロビンの想像を簡単に超えていった。体中に巻き付かれ、感じる部分を的確に愛撫してくる。乳首をくすぐり、乳房に絡みついた。胴体に巻き付くものさえぬめりが心地いい。容赦なく膣へと潜り込む触手のうねりは、ベニスでは味わえない快感。クリトリスに、ラビアに舌先をつつくかのようにする触手たちが多い。ズコズコと膣を犯されながら、優しくクリトリスをなぶられる。悔しいことだが、ロビンはせり上がってくる絶頂感に身を任せてしまいそうになった。しかし、男たちはロビンがいくのを許さなかった。

「このノロノロビームの当てられると、感覚も快感も蓄積できるんだぜ」ロビンは絶頂感を抑えられてしまった。いや、いく寸前の感覚で止められる。体の自由が利かないだけではない。それは、ひどくもどかしいことだった。



おつと…
まだまだイかせたり
なんかしないぜ？

イかせてくれって
泣いて頼ませてやる

うあああああッ！



ノロノロビームの効力は
凄まじいものだった。
本当は30秒程度しか持続しない蓄積も、
ビームを当て続けることで延長できる。
いく寸前の状態を無理に
継続させられることは、
心にひどく負担をかけられる。
もちろん体もだ。
何度も何度もイキそうになって、
体が弾けそうになる。
噴き出る愛液の量も半端ではない。
まるで蛇口を捻ったかのように
あふれ出ている。
まるで射精するかのように
びゅくびゅくと潮を吹くロビン。
体力を奪われ、快感に心までも
奪われていく。
ぐったりと呆けた顔はあられもない。
「どうした？ もう終わりか？」
確かに、抵抗する気力は
もう残っていないかった。
しかし心は折れたくない。
折れたくないと思っっているのに、
体がもうついてこない。
体はもう、快樂しか求めていなかった。
絶頂感しか求めていなかった。



「どうです？」

「そろそろ言わなくちゃ

いけないことがあるんじゃないですか？」

（言いたい……）

でも、本当は言いたくない。

でも言わないと、ずっとこのまま……」

「ほら、どうしたいんですか？」

「一生このままじらされ続けたいんですか？」

「いや……許して。もう、もう……っ！」

「も、もう、お願い……許して！

イかせて……イかせてえっ！」

「ははは！ いいさまですね！」

「お願い！イかせて！

早くイかせて！」



「おねだりするには、

それなりの誠意を見せてもらわないと」

男はビクビクと脈打つペニスを

ロビンの前に突き出した。

フェラチオを要求されているのだ。

ロビンはためらわず、それを口に含む。

「ああ、いいですね。

なかなかの舌使いですよ」

男は笑いながら、ロビンの口を狙す。

しかしビームはいつまでも解除しなかった。

絶頂感を耐えながらのフェラは、

ロビンをさらに堕としていく。

自らしゃぶることで

最後の羞恥心さえもなくされ、

ロビンは淫らに喘ぎ出す。

男のうめき声が頂点に達し、

口内を熱い精液が満たす。

それをこくりと飲み干したとき、

ようやく男も重い腰を上げた。



あああ
あああ
あああ
!

ついに来るべきときが来た。男はロビンを押し倒し、その体をむさぼる。すでに濡れそぼっている膣は難なくペニスを受け入れる。最奥まで突き入れられても、まだノロノロは解除されない。ロビンはもう恥も外聞もなく、絶頂をねだった。イかせてくれと叫んだ。「いいでしょう。それなら、これまでの快感のすべてを一気に受け取ってください！」ビームを外された。これで30秒後に、これまでのすべてが押し寄せる。それは最初、軽いシビレとして現れた。次に強いシビレ。もっと強いシビレ。そして立て続けに、絶頂感が訪れた。何度も何度も、体が跳ねる。まるで爆竹のように爆ぜる体。激しすぎる絶頂感に、ロビンは一気に理性を飛ばす。気を失った。しかしすぐに新たな刺激で目を覚ます。その連続。ロビンはもう、自分がどれほどの声を叫んでいるかさえ分からなくなっていた。



数え切れないほどの絶頂を繰り返し、ロビンは性の虜になっていた。

もはや普通の刺激では物足りない。

男もそれを理解して、

またノロノロビームを使う。

すでにイきやすくなっている体には、

ほんの1度か2度のダメで十分。

感覚を遅らせてやり、

その間に激しく膣を犯す。

乳首をつまみ、揉みしだく。

それだけでいい。30秒後のロビンは、

絶頂の嬌声をあげるだけ。

「どちらもう何発出したか、

分からなくなってきましたよ」

ロビンの膣があまりにもいい具合で、

男は何度も射精していた。

入れ替わり立ち替わりで膣を犯し、

それに飽きたら直腸も犯す。

もはやロビンは抵抗しない。

膣も肛門も口も、

どの穴でも喜んでベニスを受け入れる。

乳房に挟んでバイスリをしただけでも

イける体になっていた。

そこにいるのはもはや、

プライドの高いニコ・ロビンではない。

性の快楽に溺れた、

1人の女でしかなかった。





J-Girl. インパルス
2007年8月19日発行
製作/クリムゾン
印刷/太陽出版株式会社さま



「最後まで抵抗するところを無理矢理犯す」
ロビンから奪ったハナハナの実で全身同時愛撫



「心は抵抗しても体は快感で堕ちる」
体を振動させる能力者と触れるだけでイカせる能力者による強制絶頂



「身も心も完全に堕とす」
ノロノロピームで おねだりするまで焦らし続ける超寸止め拷問

